2009 年度中国語中級教育における実践報告

中山　　文 *，池田磨左文 **，傍島　史奈 **
于　　耀明 **，馬　　麗娟 **

（2010 年 1 月 12 日受理）

はじめに

全学で約 1000 名いた初級中国語の履修生のうち、次年度中級を履修する者は約 200 名。その翌年、上級を履修する者は 1 桁にまで落ち込む――これが 15 年間の本学の状況である。共通教育機構による新カリキュラムの施行を機に、この状況を打破したい。それが共通教育における中国語科目設立当初の目標だった。「卒業必要単位に関わらず、中国語を勉強し続けたい」と希望する学生をどうすれば増やすことができるのか。新入生の学力低下、中国への倦厭感が広がる若者を前に、講師たちは皆どのような努力を重ねているのか。

ここで取り上げる授業は中級中国語 Ⅰa, Ⅰb、 Ⅱa, Ⅱb と基礎会話Ⅰ・Ⅱである。前者は申し込みの段階で、検定クラスとノーマルクラスに分かれる。検定クラスは 2 クラス、ノーマルクラスは 5 クラス設定されており、1 クラスの定員はいずれも 25 名である。検定クラスでは春、秋 2 回の中国語検定の受検勉強を行い、その合否が成績に反映される。ノーマルクラスは文法主体の a と会話主体の b による週 2 回の組み合わせである。成績表には中級中国語 Ⅰa, Ⅰb、 Ⅱa, Ⅱb としか記載されず、検定クラスかノーマルクラスかは判別できないようになっている。

ここに担当者による、各担当科目の実践報告を残したい。

Ⅰ．中級中国語（検定クラス）報告

池田磨左文

1. はじめに

神戸学院大学「中級中国語（検定クラス）」は、日本中国語検定協会の実施する中国語検定試験において一定の級を取得することを目標として設置されているものである。

その具体的な到達目標は、前期のⅠは準 4 級～ 4 級、後期のⅡは 4 級～ 3 級である。6 月実施の検定試験で 3 級を取得する学生や、11 月実施の検定試験で 2 級の取得を目指す学生がいないわけではないが、ごく少数であるのでここではそれを例外とし、もっぱら準 4 級～ 3 級に絞って考察を行なうこととする。

---

* 神戸学院大学人文学部教授　　** 神戸学院大学人文学部非常勤講師

2. 中国語検定試験合格率の推移

——第 59 回（2006 年 6 月実施）～第 68 回（2009 年 6 月実施）

2006 年 6 月から 2009 年 6 月までに実施された中国語検定試験のうち、「中級中国語（検定クラス）」を受講した学生の合否状況を次に示す。

実施回			59	60	62	63	65	66	68
実施年			2006	2006	2007	2007	2008	2008	2009
実施月			6	11	6	11	6	11	6
準 4 級	本学	受験者数	27		19		17		19
		合格者数	26		18		15		10
		合格率	96%		95%		88%		53%
	合格率の差		+22		+25		+24		-17
	合格率		74%		70%		64%		70%
	平均点		70		68		65		63
	合格基準点		60		60		60		55
4 級	本学	受験者数	27	13	32	33	37	31	36
		合格者数	22	10	13	6	11	15	5
		合格率	81%	77%	41%	18%	30%	48%	14%
	合格率の差		+9	+14	-5	-21	-26	-17	-23
	合格率		72%	63%	46%	39%	56%	65%	37%
	リスニング	平均点	77	69	71	54	67	73	53
		合格基準点	60	60	60	60	60	60	55
	筆記	平均点	70	70	59	65	65	68	55
		合格基準点	60	60	60	60	60	60	55
3 級	本学	受験者数		14		16		14	
		合格者数		0		1		0	
		合格率		0%		6%		0%	
	合格率の差			-36		-26		-38	
	合格率			36%		32%		38%	
	リスニング	平均点		59		55		67	
		合格基準点		65		60		65	
	筆記	平均点		69		61		58	
		合格基準点		65		62		60	

注 : 合格率・平均点・合格基準点は中国語検定試験協会の発表による。なお、合格率・平均点は小数点以下第一位を四捨五入してある。

中国語検定試験には、準 4 級と 4 級とには 60 点、3 級には 65 点という合格基準点が設けられているが、問題の難易度に「ぶれ」の生じるのが避けられないため、日本中国語検定協会は合格基準点を調整することによって合格率を一定の範囲に収めようとしている。おそらく得点の分布も勘案しているものと思われる。

「中級中国語（検定クラス）」が中国語検定試験において一定の級を取得することを目標として設置されているものである以上、授業担当者のノルマは自分の担当する学生の合格

率が全国平均を超えるようにすることである。担当する学生の合格率が全国平均を下回るようでは、授業担当者はその職責を全うしたとは言い難い。

「中級中国語（検定クラス）」を受講する学生の合格率と全受験者の合格率との差を示したのが、表中の「合格率の差」欄である。準4級では2009年6月実施の第68回、4級では2007年6月実施の第62回以降、3級ではすべての回で「中級中国語（検定クラス）」を受講する学生の合格率が全国平均を下回っており、4級と3級とでは改善の兆しも見られない。学生に成果を上げさせようと教材や授業方法などにも毎年手を加えているが、効果が見えていない。

3. アンケート結果から見る、授業を改善するための手がかり

「中級中国語（検定クラス）」の授業を改善する手がかりを得るため、当該クラス2009年度前期最終授業日である7月25日、学生に対してアンケート調査を行なった。記名・無記名は任意とし、以下の4点について自由記述形式で答えてもらった。回答数は40、そのうち記名回答が34、無記名回答が6であった。なお、この時点で、第68回中国語検定試験の結果はすでに出ており、アンケートの記述も当然それを踏まえたものである。

1. 自分なりに努力・工夫をした点
2. 自分の努力・工夫が足りなかった点
3. 授業全般（教材・先生・進め方など）について改善を望む点
4. 初級（1年生）授業全般に対する意見

ここでは、記名回答のうち、次の3つのグループに属するものを紹介する。名前を仮にA～としておく。

(1) 期末試験の成績が4月30日に行なわれたクラス分け試験の成績より悪かったグループ

到達目標別クラスを編成するため4月30日にクラス分け試験を行なったが、学習結果の推移を見るため期末試験もそれと同一の問題にしてみた。ほとんどの学生は期末試験の成績の方が良かったものの、期末試験の成績がクラス分け試験の成績より悪くなっていた学生が6人いた。このグループは、その6人のうち記名でアンケートの回答が得られた5人である。なお、A・B・D・Eの4人はクラス分け試験・期末試験ともに成績が下位に位置しているが、Cはクラス分け試験は第6位、期末試験は第9位であった。

A:
1. 空白
2. 先生の講義はわかりやすかった。ただ自分が勉強しなかったことが原因と思う。勉強時間が足りないのが明らかだった。
3. 空白
4. 一年の時の授業は、自分の姿勢にも問題あるけれど、点の書き方もそんなに言われた覚えはないと思う…。

B:
1. 教科書をみなおしたりした。
2. 勉強時間が圧倒的に足りなかった。他の教材でも勉強すればよかった。
3. 授業はやたら速くて、あまりついて行けなかった。もっとゆっくりていねいにやっ

てほしい。

4. あまり覚えてないけど、当時は理解できていた気がする。

C: 1. 教科書に出てくる単語を覚え、検定試験の過去問を 2 回以上やった。

2. 漢字の書き取りで、しっかり覚えられていない字があった。

3. 空白

4. 基本例文の発音テストが毎回の授業であったので、正しい発音に近づくことができたと思う。

D: 1. 授業は毎時間しっかり聞くようにしていた。

2. 授業以外の自習をほとんどしていなかった。毎週の課題もあまりしていなかった。

3. 少し授業の進め方が早かった。

4. 今回の試験でリスニングがあまりできなくて難しいと感じたので、1 年の時にもっとリスニングをしておけば良かったと思いました。

E: 1. 休みの日や学校帰りに友達と勉強会をひらいた。暗記カードで単語・文法を覚えた。

2. 自分の最初のレベルが低すぎて、勉強している“つもり”になっていた。復習の仕方があまかったので細かいところまで頭に入っていなかった。漢字や根本的な間違いが多かった。宿題もきちんと出来なかった。

3. 自分がついていく為には、必要な厳しさがあったので、ちょうど良かったと思う。

4. 厳しかったけれども、勉強になること・ためになることなど、いろんな話が聞けてよかった。少しついていけないくらいだったけれども、自分のレベルの低さに気付けたので、次回こそがんばろう！と思う。

(2) 6 月 28 日に行なわれた第 68 回中国語検定試験で 4 級に合格したグループ

F: 1. 何度も何度も、単語あるいは文章を読んでリズムを覚えた。学校で買った教材だけでなく、他の参考書も買って例文を頭に入れて行った。

2. リスニングを十分に練習していなかった。

3. 長文読解の部分は、実践的なものにした方がいいと思う。ただ訳を出すだけではどうにもならないと思う。たぶん問の傾向とかあるだろうし、その答えるポイント（どこを見たらいいかとか）もあると思う。

4. 毎回授業の最後にテストがあったが、教科書を見ていいということだったので、あまり意味がなかったように思う。

G: 1. 筆記の授業ではそうでなかったが、リスニング授業では全体の出席率がとても悪かった。努力には入らないかもしれないが、やはり毎回授業を受けるべきだと思う。また、予習には辞書や 1 年次の教科書などを調べて、時間をかけた。

2. 自分の弱い所や判らなかった所を見直すことはしても、改めてまとめ、ノートに書くということをしなかった。やはり書いて覚えることが大事だと痛感した。

3. 空白

4. 初級と中級の難しさの違いが気になった。中級で急に難しくなったようだ。検定

クラスなので仕方がないのかもしれないが、初級でもう少ししっかり中国語を学んだ方が判りやすかったように思う。具体的に言うなら、単語量を増やしたり、文章を作らせたりすると、実力がつくのではないかと感じた。また、中国語の日常会話があまり無かったので、それも増やした方が良いと思う。

H: 1. 時間をかけて復習をしただけ。
2. 他の授業もあり、中国語に時間をかけられないことがあった。
3. 特になし。あるとすればリスニングをもっと重点的にしたい。（自分で勉強しにくいため）
4. 特にない。成績が悪いのは私を含め生徒の努力不足

I: 1. 授業で習った文をすべて暗記する。トイレにはる。書きまくる。
2. 文法をもっとていねいにやっておくべきだった。まちがいやすい所、混乱しやすい所。
3. テキストの値段が高い。もう少しスムーズに授業を進めてほしい。リスニングの練習をもっとやってほしい。実戦力をつけたい。
4. 1 年生ではもっと漢字とかの練習などをするべき。細かいとめ、はね、ピンインや発音も。日本人の先生も中国人の先生も発音に甘くて、今になってとても苦労している。やはりはじめの基礎が大切です。

(3) 6 月 28 日に行なわれた第 68 回中国語検定試験で 3 級に合格したグループ

J は 1 年生のときに 2008 年 11 月実施の第 66 回中国語検定試験 4 級を受け、合格している。大学に入るまで中国語を学習した経験はなく、ほかの多くの学生と同じように 4 月から学習を始めた。週 2 回ある中国語授業のうち、1 つが池田の担当する「中級中国語（検定クラス）」授業の直後であったためその教材に興味を持ち、残部を持ち帰って自習し、1 年生での 4 級合格に至ったということである。K は中国での生活経験がある学生である。

J: 1. 単に問題を解くのではなく、解答を見て、正解の解説はもちろん、他の選択肢の解説も読み、問題の応用が出来るように対処する。
2. リスニング問題とピンインの問題
3. 文章の読解をやるだけでは、高校の時の英語と同じであまり覚えられないと思います。
4. 特にありません。

K: 1. 文法は去年ある程度やったので、3 級のよく出る単語を多く覚えました。問題は並び替え、穴埋めなど、ただ番号を書くだけではなく、一文書きました。使った教科書の中の例文と単語は重要だと思ったので 3 回は書きました。
2. 中検の最後の問題に日文中訳があり、その対策はほとんどしなかった。せめて過去問の 3 回分くらいはやっておけば良かったと思いました。あと、単語のピンインと四声は覚えきれていなかったと感じます。
3. 教科書が高すぎると思います。あと、進め方としては、筆記対策はけっこうした

が、リスニング対策をほとんどしていなかったように思います。

4. 先生によって違っていたと思いますが、文法をばっと説明して、それでほとんど終わっていたので、生徒が理解していないままどんどん進んでいったように思います。

4. 4 つの指摘

これらのアンケート結果から次の 4 点を指摘したい。

(1) 授業に出席するだけで効果を得ることは不可能。「覚える」という作業を自分から積極的にやらなければ、検定試験での合格が難しいだけでなく、学力の伸長さえ期待できない。声を出して発音し、手を動かして書き、それを通して意識的に「覚える」という作業は、中国語学習において必要不可欠である。

(2) どのグループに限らず、リスニング訓練の不足を指摘する学生が多い。2009 年度「中級中国語（検定クラス）」のリスニング試験対策授業はすべて中国人担当者によって行なわれているが、授業の一部を中国語で行なったり即席の応用練習を教室で行なったりすることにより「ナマ」の中国語に触れる機会を学生に提供することが十分にできていない可能性がある。もちろん、教材自体もさらに工夫をし、授業形態に関係なくリスニングの訓練が可能になるように改良していかなければならない。

(3) 成績下位のグループには、1 年生の初級段階での知識が十分に身についておらず、そのため「中級中国語（検定クラス）」の授業内容を理解することが困難な学生が少なくない。これらの学生へは、教材の量を思い切って減らし、基本事項を理解させ、記憶させることに重きを置いた授業を行なうべきかもしれない。前期で 4 級に合格させることはあきらめ、まず準 4 級を確実に取得できるよう指導することも考えなければならない。

(4) 1 年生の初級段階において、一部のクラスで授業が十分にていねいに行なわれていない可能性がある。発音や漢字、さらには標点符号まできちんと指導し、基礎をしっかりと身につけさせるよう、より一層心がけていかなければならない。

5. まとめ——2010 年度に向けて

2009 年度「中級中国語（検定クラス）」学生の中国語検定試験の結果は、私たち授業担当者にとって満足できるものではなかった。「中級中国語（検定クラス）」という、ある意味で学習を強いられる授業を自らの意志で選択した学生たちに、彼らの期待する結果を出させてやれなかったことを反省するとともに、いろいろな意味での指導不足を心から申し訳なく思う。

「中級中国語（検定クラス）」を受講する学生の多くは、いわゆる受験勉強というものをした経験が乏しいのかもしれない。そのため、学習方法がよく分からず、授業に出席するしか学習の手立てを持たない学生が少なくないのではないだろうか。このように学習すれば一定の成果を上げることが出来るのだというように学習方法を具体的に示唆しながら、学生自身が主体的に学習を進めるように仕向けることが、何よりも必要とされているよう

に思われる。

せっかく学んだ中国語である。何とかして身につけさせてやりたいと思う。

Ⅱ．中級中国語（ノーマルクラス）報告

Ⅱ－１.「ノーマルクラスａの針路
――新方式実施前に考えたことと実施後に感じたこと」

傍島　史奈

1. 新方式実施に先立ち

(1) 授業の内容

中級ノーマルクラスでは、2009 年度より、a は日本人が担当する読解・朗読の授業、b は中国人が担当する発音矯正・会話の授業とそれぞれの特徴を設定し、別々の授業をすることとなった。

まずは教科書選び。初級では個々に完結した短い一文を読んでいただけなので、急に難しい長文を読むのは適当ではないと考えた。そこで、『中国語への道【準中級編】―浅きより深きへ―』（内田慶市・奥村佳代子・張軼欧著　金星堂）を選んだ。理由は 5 つ①準中級というレベル設定。②余裕を持って授業できる分量である。③会話文とその背景を説明した 100 字前後の短文という構成で話題に入りやすく、さらに練習問題で反復学習できる。④今も変わらぬ朝食屋台風景から現代の若者や社会問題まで多岐にわたる最新の話題の中に、伝統的習慣と新しい中国の姿の両方が盛り込まれている。⑤「2008.8.8 北京オリンピック開幕の日に」というまえがきがあったこと。

①②③はノーマルクラスにとって重要なことである。私はノーマルを担当したそれまでの 2 年間、最初の授業で必ず「なぜ中国語を続けたいと思ったか」など授業に関する要望も含めてアンケートしてきた。うれしいことに、ほとんどが「1 年生の時に習って楽しかったから」「1 年でやめるのはもったいないから」という学習に前向きな学生である。しかし、検定クラスではなくノーマルを選んだという点について、「難しすぎてしんどくなるのはイヤ」というのが本音のようだ。教科書以外に「中国の映画を見たい、音楽を聴きたい」「中国の祝祭日の様子、文化・歴史に関することが知りたい」といった要望もあり、ノーマルクラスに対しては、語学学習と同時に文化的な要素をも期待しているといえる。また、単に「単位がほしいから」とする学生も少なくない。さらには、初級の単位を落とした学生が履修することもある。やる気も興味もレベルもすべてがまちまちであり、ノーマルクラスでは検定クラスのような確定的な目標・目的は設定できないのである。また、中級という名である以上、やはりレベルを上げた文章を読みたい。しかし、分量が多すぎるのであれば、これまで 1 年で 1 冊の教科書をリレーしてきたことを考えると、2 冊に増える今年度からは、内容を消化しきれない学生がますます増える恐れがある。そうなれば、レベルはどうであれ、せっかく中国語を続けたいと考えた学生のやる気を削いでしまうことになりかねない。したがって、新たに出てくる文法事項はもちろん、既習の初級文法をも復習

と称して説明する時間が必要となる。さらに、授業内容に文化的要素も求められているとすれば、映画や音楽を鑑賞するなど中国に関する情報を提供する時間（これは各担当者の知識と経験に頼る）も必要となる。したがって、教科書の分量は欲張らないほうが良い。各学生のレベルにかなりの差があることを考慮しても、まずは“とっつきやすさ”が教科書に求められることになる。

④⑤は、中国は急激に変化しており、ほんの数年で時代遅れになるため、やはり新しさは重要な要素である。中国になにかしら興味を抱いて中級ノーマルを履修する学生にとって、最新の中国情報が満載の教科書は魅力であると考えた。もちろん、教える側にとってもそうであるはずだ。

(2) 近年の中国語教育における現実

いよいよ新年度、中国語を続ける理由は、積極的に学びたいと考えた学生の中に単位が欲しいだけとする学生も数人いるという、例年通りの結果となった。しかし、中国について自由に書いてもらったところ、「反日暴動（2002 年サッカーワールドカップ予選の重慶での暴動に始まる一連の抗日運動)」「食の安全」「人権問題」「偽造・模造品」に対する嫌悪を書いた学生が 20 名中 6 名もいた。中国語履修者が大幅に減るなど、ここ数年の中国に対する若者の厳しい目は聞いてはいたが、過去 2 年で無回答や「中国に興味はない」という回答はあったものの、このようなマイナス点をわざわざ書く学生は私のクラスにはいなかった。それが今年度は、無回答と「興味なし」をも含めると、実に半数以上の学生が中国に対して特に良いイメージがないという結果になった。これはたった 1 クラスの結果ではあるが、ノーマルクラス全体の問題として捉えるべきであろう。

それではなぜ中国語を続けるのか。やはり、就職する将来を見据えてのことである。サッカーの試合後の暴動にショックを受け中国に対してあまり良いイメージが湧かなくなった当時の小中学生は、ここ数年の一連の事件・報道によってそれが決定的なものとなったようである。今後もしばらくはこのような学生が出ることは簡単に予測される。しかし、世界的不況の現在もなお中国の経済は成長を続けており、好き嫌いに関わらず大学では中国語を学んだほうが良いと考える学生は、これ以上大きく数を減らすことはないだろう。とはいえ、なにごとも興味を持って楽しく勉強できなければ続かないものである。2 年生以上が受講する中級ノーマルでは、どのクラスにも毎年、一度も出席しないまま終わる者が数名、途中から出席しなくなる者も数名おり、これらを合わせると 5 人前後から 8 人前後受講者が減ってしまうのが現状だ。始めから出席しない学生に対してはどうしようもないにしろ、途中でやめてしまう学生に関しては、なんとか引き留めるようこちらも努力しなければならない。中国に対してあまり良い印象を持たない学生が以前より増えた今、このことは特に重要な課題である。

2. 新方式での授業風景

今年度のノーマルクラスでは、b でナマの使える中国語を中国人の先生から直接学ぶことで、毎時間よい緊張感と充実感を味わうことができるはずだ。となれば、日本人班である a では何ができるのか、考えなければならない。a は日本人が中国語を教える授業であ

る。この強みは、我々自身が、学生と同じくこれまで中国語を学んできたという点にある。これによって、少し複雑な文章を読むにあたり、どのような日本語との違いでつまずくことがあるかなど、自身の経験を踏まえて学習方法を話すことができるはずだ。さらにこれにとどまらず、学生がどのようなところに興味を持ちそうか、あるいはどうすれば興味を持って勉強を続けることができるかを、これも中国語学習経験者として、各担当者が自らの経験と照らし合わせ、推測しながら授業を進めることができるはずである。我々のやるべきことは、学生に興味を持たせ、それをきっかけに 3 年目・4 年目と中国語を続けたいと思うやる気を引き出すこと、あるいはやる気を育むことにあるのだ。

以上から、a では、初級文法も黒板に書き、それを丁寧に解説して学生の苦手意識を取り除き、自信につなげようとしている。複雑化した文章についても、品詞を色分けする、単純化した文例を示すなどしてやはり丁寧な説明を心掛けている。また、日本とは異なる状況を目で確かめる機会も作る。たとえば、教科書でインターネットが話題になっている場合は中国のサイトの画像を見せ、病院が話題になっている場合は中国の病院を特集したテレビ番組の録画を見せるなど、各担当者がそれぞれに工夫している。それから、その話題に沿った中国での自身の体験談を語るなどして、少しでも学生に中国を身近に感じてもらうことも大切だ。こうして教科書の内容に入りやすい状態にして、2 週間に 1 回は 100 字前後の文章を学生自身に自力で訳させるようにしたところ、前期に比べて後期は学生の理解が数段速くなり、授業の進行もスムーズになったと実感している。また、意味を捉えながら 100 字前後の文章を一人で朗読する練習を通じて、新たな文章を前にしても、中国語のリズムに応じて一つ一つの単語や文法に学生自身が自然に気を遣うようになったと感じられる。この点に関しては、b でしっかりと発音を行った成果との相乗効果といえるだろう。その他、中国語で書かれたクイズを解く、中国語で歌われている日本の流行歌をその歌詞を見ながら聴く、日本のアニメの中国名をクイズにするなどして、中国に親近感を持たせようともしている。

3. ノーマルクラス a の役割

新たな方式をとって 1 年目、留学を何年も前に終えた我々教える側が、教科書の最新の話題に戸惑うこともあった。すでに“浦島太郎状態”にあるといえる我々自身にも、今の中国の情報にもっと敏感に反応して、変化し続ける中国を受け取ろうとする柔軟な姿勢が必要なのである。ノーマルクラス a の最大の役割は、1 年生で中国語を選択してなんとなく続けようと考えた学生に、今後もずっと続けたいと思えるような環境を与え、彼らを次の段階へと無理なく導いてやることである。これは、教える側が教科書の情報からどれだけ話題を膨らませることができるか、“異文化中国”の今昔をどれだけ親近感が湧くよう伝えることができるかにかかっていると、改めて感じている。

Ⅱ－2.「ノーマルクラスｂの成果と問題点」

于　　耀明

1. はじめに

この授業の概要をシラバスから引用する。

講義名　中級中国語Ⅰｂ・Ⅱｂ

テキスト　是永　駿監修　張　美霞・陳　薇著『加油！中国語』（郁文堂）

担当者　于耀明（講義代表）、劉暁嵐、佟岩、李玲、張軼欧、張蘭、金晶

講義の主題と目標　この講義は初級中国語が終了し、更に中国語の会話を身につけ、ステップアップしようとする 2 年生の諸君が対象である。テキストの各課の本文は、日本から中国へ留学した学生が現地で日常生活を送るさまざまな場面より構成されている。習う言葉の実用性が高く、センテンスも短く、すぐに覚えられ、すぐに話せるものばかりです。会話が中心の授業ですので、まずしっかり発音の練習をし、言葉を覚え、相手の質問に受け答え、自ら質問することができるように、確実に中国語でコミュニケーションできる力を伸ばしていく。

2. この授業の成果

1 年間を通して、各クラスの担当教員は学生の中国語でコミュニケーションできる力を伸ばすために、講義中最大限に発音練習と会話練習を繰り返して指導をした。結果として、学生からは「母国語を中国語とする教員からの直接の指導を受け」、「会話や発音の練習がきっちりして中国語の本当の発音を習得し」「十分に音読練習があってよかった」「たくさん声に出して発音を練習するのはとてもよかった」「1 年生の時よりも声に出して読む回数が増えたので、前よりは発音もマシになった」とか、「発音や会話をよくするので眠くならずに集中できた」「発音の間違いをその場で先生が正してくれるので勉強になった」「授業のペースや内容が分かりやすく、少しずつ中国語が身についている気がする」「この授業は私が今受けている授業の中で一番緊張感があって集中できるので、力がついた」など、アンケートを通していろいろと評価している。

アンケートで、「授業中での音読・会話練習の量」について尋ねると、「十分だと思う」「もっと増やしてほしい」と 2 項目の回答率は約 92% で、「この授業を受けた満足度」では、「十分満足している」と「満足している」のプラス評価が 98% である。「現時点での自分の目標の達成度」についての回答は、「簡単な会話が話せるようになった」が約 9%、「まだ話せないが、話す努力をしたい」が 85%、「難しすぎるからあきらめたい」が 6% である。よって、この授業を通して、多くの学生は授業中で積極的に発音や会話のレッスンに取り込み、それぞれそれなりの学習効果が収めたと考えられる。

クラスあたりの人数が 20 人未満のため、授業中何度も当てられて、常に緊張感があり、集中してよい勉強ができたと思われる。また、「教科書以外に中国についての話をしてくれるのでよかった。もっと聞きたい」「中国の文化を知ることができ面白い。語学を含め、興味が出てくるようになった」「教科書にない補足説明や豆知識をいろいろ紹介してくれ

たので、知識が深まった」など、プラスアルファの効果も出たと考えられる。

3. この授業の問題点

この授業で長期欠席者の多いことが 1 番の問題だと考えている。履修登録者数が 125 名に対して、長期欠席者は約 27% の 33 名にも上っている。これはこの授業特有の問題かどうかは特定できないが、登録した学生を一人一人指導し学業を伸ばしてあげたいので、教室に顔を出してほしい。

アンケートで「1 回の授業に使った予習復習の時間」について尋ねると、「1 時間以上」が 2% 未満、「30 分程度」が 40%、「ほとんどやっていない」が 58% 強で、約 6 割の学生が予習復習はほとんどやっていないことがわかる。この項目については、クラスによって結果が偏っている。たとえば、A クラスで予習復習をしている学生の割合は 70% に対して、B クラスでは 30%、C クラスでは 10% に過ぎない。これは単に学生の学習態度の差と言い切れる問題ではなく、担当者の指導にも問題があると考えられる。きちんと宿題を出し、そのチェックを行っているかどうかの問題ではないかと思われる。

テキスト『加油！中国語』の適正についてアンケートをしたところ、学生はほぼ全員が適正だと答えた。だが中には、「ab 別々の教科書を使うのではなく、ひとつに統一したほうがよい」とか、「文法中心、会話中心といったように分けたほうがよい」という意見も見られた。教員のアンケートにも「できれば、現行の『加油！中国語』（文法説明がかなりの紙面を占めている）を会話中心のテキストに換えたほうがよい」という意見があった。新年度のテキスト選定に考慮すべき建設的な意見だと思われる。

4. この授業の改善すべき点

この授業に対する学生の満足度は 90% 以上あった。だが、改善すべき点として、「読むスピードが速いのでもう少しゆっくり」「（先生が）中国語を話す時、速すぎて聞き取れないことがあるのでゆっくり話してほしい」「授業のスピードが速すぎるので、もう少しゆとりをもたせてほしい」、逆に「授業の進む速度が遅い」など、少数ながら教師陣として一層の教育効果のためには耳を傾けるべき貴重な意見もあった。

教員側からは、授業設定の内容が多すぎて、それにテキストが会話専用のテキストではなく、文法解説の紙面も多くなっているために、会話練習の時間が十分に取れないことが問題で、改善すべきだと指摘されている。この指摘は新年度のシラバス作成に考慮すべきことだと思われる。

Ⅲ．基礎会話クラス 「基礎会話クラスの現状と問題点」

馬　　麗娟

「基礎会話クラス」は昨年度に設置されてから今年で 2 年目を迎えた。今年度も昨年度と同様に 3 クラスが開講され、40 人程度の受講生があった。筆者のほか、張応華先生、張蘭先生がそれぞれのクラスを担当した。新しいテキストを採用したことを除くと、授業の進め方はほぼ昨年度と同じで、成績の評価基準は統一された。授業の具体的な方法は各先生に委ねた。

新テキストの採用にあたって、まずは実用性であること、そして中国語経験者に向くことを条件とした。しかし、実際に授業が開講したら予想外の状況が生じ、当初想定した進め方を変更せざるを得なかった。

予想外の状況とは、このようなものだ。筆者担当のクラスでは登録者数は 13 名だった。だがその中に中国語初級の履修者は 8 名しかいなかった。残り 3 名は一年生の時に中国語を受講したが単位を落としていた。他の 2 名は中国語以外の語学からの変更であり、中国語の履修歴が全くなかったのだ。本来ならば、これらの学生は「入門会話クラス」又は「初級中国語」の再履修クラスに入るべきであり、そのほうが彼らにとってより適当であるが、さまざまな理由から「基礎会話クラス」に入ることになった。

何人かの学生からの話によると、「入門会話クラス」に入る予定だったが、すでに満員で入れなかった。友人がこのクラスにいるので、自分もこのクラスに入りたい。授業時間が自分の都合に合っていた、などであった。前者については、筆者も「入門会話クラス」を担当しているので、ある程度理解できる。

「入門会話クラス」に対する学生の需要は非常に高く、筆者が担当している 3 つの入門クラスはいずれも登録者数は満杯であった。恐らく少々遅れたらもう履修登録ができないのではないかと推測する。しかし実際に授業が始まると、クラスにもよるが、最初から授業に出ない学生が大概いる。しかしこのような学生も履修登録を取り消さないので、クラスに空きが出ない。そのため本当に授業を受けたい学生が他のクラスに流れるしかないという現状である。このような現象はほかの先生が担当するクラスでも見受けられた。教師としては、どのような理由にせよ、せっかく基礎会話クラスに入ってきたのだから拒むことをせず、ほかの受講生と一緒に授業を受けさせた。

このために、受講生間に明らかにレベルの差が存在した。このままではテキストを中心に授業を進行するのは無理だろうと考え、授業の進め方を変更することにした。授業は主に中国語経験者を中心に進めつつ、未経験者にも考慮が必要である。できれば両者とも受け入れ易い進め方を取り入れたいと考え、以下のような授業方法を取った。

まず授業始めの 30 分は主に挨拶や決まり言葉を練習する。その後はテキストに入り、適宜中国文化についての紹介を加えて授業を進めた。また挨拶の言葉などについても、簡単な内容をマスターしてから少しずつレベルアップし、応用範囲を広げていくようにし、テキストの内容もできるだけ丁寧な説明を努めた。結果として授業進度は当初想定したより遅くなったが、内容は分かり易く、より確実に覚ることができ、そのために学習意欲も

良い状態で持続できたと考える。

以上のように「基礎会話クラス」に中国語の未経験者が混じる可能性は、今後も十分考えられる。そのためテキストを選ぶ際には、実用性があるだけでなくその難易度も考慮しなければならない。しかしクラスが少人数であるからこそ、このような状況があっても調整し易く細やかな対応もできたのだ。受講生は基本的に学ぶ意欲があり、非常に教え易い。これは授業がうまくいくための大きな要因である。このような学生がもう少し増えればと願いたい。

「基礎会話クラス」は開講して 2 年目だが受講者数はあまり大きな変化がなく、横這いである。特に「入門会話クラス」と比べるとかなりの差がある。もちろんその理由は一概には言えない。しかし、受講生増加のためには 1 年生の中国語受講生に対してもっと宣伝する必要があると考える。同時に、中国語を学ぶ楽しさをもっと実感できるチャンスも必要かもしれない。

1 年生用の「入門会話クラス」を担当していて非常に気になるのは、1 クラスの受講者数が多いことである。登録者 25 名では、全員が来なくても（実際に登録者全員が出席することはほとんどなかった)、「初級中国語」クラスの人数と同じである。そのため会話クラスでありながら、それほど充実した会話練習が行えないのだ。また、受講生の受講意欲もばらつきが大きい。受講者がより確実にそして楽しく学び、より長く続けるにはまずは「入門会話クラス」のクラス受講者数を減らすことあるいはクラス数を増やすことが望ましい。

終わりに

2009 年 12 月、検定クラス受講生の受験結果に落ち込んでいたところ、嬉しいニュースが舞い込んだ。本学で使用している初級用テキスト「みんなの中国語　第一歩」「同　第二歩」だけを繰り返し勉強して、3 か月間で検定試験準 4 級と 4 級に同時合格したという一般の方（50 歳、男性）のお便りである。このテキストは、本来検定試験合格を念頭において作成したものだったので、作成者としては安堵した。

検定クラスの受講生の合格率が悪いのは、決して初級のテキストが悪く、基礎力が不足しているからではない。やはりやる気の問題なのだ。だが、実はそれがもっとも難しい。どうすれば彼らの向学心を維持させることができるのだろう？

本報告からは、現場で奮闘する担当者の姿が浮かび上がった。検定クラスは受験結果が一目瞭然である。検定クラスは責任が重いからと、担当を渋る先生もいるなか、池田先生には科目創設以来ずっと担当をお願いしている。例年教材を補充し、到達度別クラスを編成しと工夫を重ねているのに、結果が出ない。担当者としての焦燥ぶりが報告から伝わり、こちらも申し訳ない気持ちになる。だがこのクラスは本学中級中国語教育の大きな特徴の 1 つであり、これまでの歴史もある。なんらかの形で継続したいと考えている。

ノーマルクラスでは他クラスとの運営のバランスをとろうとして、まとめ役に徹する傍島・于両先生の奮闘ぶりが、ありがたい。受験勉強ばかりの検定クラスが辛いのであれば、

ノーマルクラスをベースに、一部で検定試験対策を行うクラスの設定もあり得るのかもしれない。

また 2 年生用に設定された基礎会話に中国語の未経験者が入っていることは、馬先生の報告で教えられた。この状況を解消し、基礎会話クラス本来の人数を増加させるためには、入門会話クラスの増加が必要だという提案は拝聴に値する。また 1 クラス 25 名という入門会話クラスの定員数については、至急再考する必要があるだろう。

現場を離れると、やはり見えなくなるものが多い。そのことを常に心に留め、非常勤の先生方と連絡を密に取りながら、諦めることなく本学の中国語教育を考えて行きたい。